

猫うつつ

猫の人間妄想記

アパッチ純情

初見の人方は私を見て驚かれるが、次には近づき触ろうとする。敵対心のないのは理解できるが、その顔ときたら、だらしなく緩みきりながら、にじり寄ってくるのだから、気味が悪い。

私は飼い猫とは違い人っただしではないので、そうやすやすと撫でられ咽を鳴らすと思われては、はたはた迷惑である。まあ、女性は別であるが。

恥を忍べば女性には積極的に触って欲しい、狂おしいくらい触って欲しい。こんなことをいっちゃあなんだが、猫であるが人間の女性をいやらしい目で見ている。

助平だ。助平猫だ。自負している。

女性でも子供は苦手だ。子供は私の天敵である。子供が私を探し回るので、私は棚から棚へ移り身を隠す。

捕まえられ腹を叩かれたり、無理矢理抱き上げられたくないもの。

昨今というものの体重が重くなり逃げるのは難儀している。

発見されると、キー、と即倒しそうな声を叫び追っかけてくるからたまらない。

常連の方は、塩梅を承知してくれていて、追っかけてこなければ、目の端で捕らえても軽く笑みを寄すくらいだ。

私は人見知りなので、このくらいの距離感で接してくれれば、そのうち顔に慣れ、館内の所作を見極めた後、挨拶をする仲になれるってなもんだ。

礼節をわきまえないのが子供である。まあ苦手だ。

子供を警戒しつつ日課の巡回を終え、暇になった。外に出て散歩でもしてこようかと考え、足取り軽く歩いていていったが、自動ドアが開いた途端、熱波に踵を返し冷房の効いた図書館内に舞い戻る。

こんなに暑くては内臓が溶けてしまう。この間、暑さを我慢して外に出たが、熱っされたコンクリートに肉球が焼け、急いで噴水に飛び込んだが、いまだにひりひりと具合が悪い。水が嫌いとかいってる場合ではなかった。

館内にはTシャツの色を変えた汗の引いていない人と、涼をとり腰ソファに根を張る人が混ざり合っている。汗の臭いがフロアに沈殿しているようだ。

カウンターには書士が、U字のテーブルに四名が静かに座り業務に励んでいた。ご苦労なこった。

私はカウンターの上を練り歩き、書士の業務を邪魔した後、詩、宗教の棚に上りちょっくら寝る姿勢に入る。四股を伸ばすと、自然に爪が出た。館内の空調が耳障りだが我慢できんこともない。

冷えた風が、毛の生え変わった体を通り抜けた。

うとうとしていると見知った顔が入ってきたので、昼寝を中断して男の後を付いていく。

男のくせに長髪を団子に結び、黒ぶちの眼鏡のフレームで隠れた、切れ長の目は無愛想である。

こいつは一丁前に人目が気になるらしく、人目がないときを見計らい、私にささっと触れた。

館内では私を避けて歩いている節がありこいつは猫が嫌いだと思っていたが、ふとみせる眼差しに、熱っぽくねっとりとした愛猫家特有のものがあり考え直した。

証拠に人が少ない時には、私をよく撫でる。

こいつは猫の心得を承知しているらしく、撫でる力具合、ポイントと心地よいことこの上ない。

昔、猫を飼っていたのではないかと思う。撫でている時の高揚した顔を見上げていると、飼っていた猫は亡くなっていそうだ。

後を付いていくと、こいつは何を探しているんだか、検索機の席に座り、あらかじめ書いてきたのだろうメモを見つつ、ポチポチとキーボードを打つ。大層なふりしているが、たいした本を探してはいるまい。今や廃盤になった文庫をくらいが関の山だろう。

私はこいつが打つキーボードの上に乗る、乱打してやった。画面には到底日本語の体をなさない文字が羅列されていく。

「ああ、どけてくれよ」

困ったように手を払い、私をどかそうとする。私は負けじと、払いのけようとする手を、ものともせず乱打の前足を止めない。

抵抗を諦めたこいつは、棚を巡り三冊本を手に取り、長方形のソファに向かい、ふうと一息ついて腰掛けた。周囲を見回した後、ソファに飛び乗った私の鼻筋と咽を撫でる。

「お前、少し痩せたほうがいいぞ」

こいつは私の頬をつまんで言う。

なんと失敬な。Tシャツに贅肉のシルエットが出ている奴に、言われる筋合いがない。

こいつは私をひとしきり撫で回すと、今度は本を読み耽った。

まぶたが重くなってきた所、私の嫌悪するデリカシー皆無の声色がしてきた。

こいつも、喧しさに本から目を離し、眉間に皺を寄せた。

私は眠気を引きずりながら避難先を探し、棚に空いた隙間に身を隠す。プラトンの本が一冊私に押し出されるように、棚から落ちた。

棚から顔だけを出し、声の主を盗み見た。原色のTシャツを着た小太りの男の子と、その一回り小さい弟とみられる男の子二人が、母親に連れてこられている。

子供の肌は日差しによく焼けていて、日焼けの境がみられなく、利発そうにはどうしてもみえない。

子供は普段、進んで図書館に来ようとしなさそうである。静かな空間に興奮し、抑えてじゃれているつもりが、すでに他者の気が散るほどの喧しさだ。

私の経験上、この手のガキは徐々に自分が抑えきれなくなり、叫びながら走り回るのがおちである。それで最後は書士に、注意され萎れるのだ。

私という存在は子供のたがを外すには十分な要因になり得る。見付かれば、ヨーイドンの相手は私になり難儀するのが容易に想像できた。考えただけでも、憂鬱さに立った耳が折れてしまう。

「ちょっとお願いだから静かにしてよ」注意する母親のほうも声がでかい。

辛抱できなくなった弟のほうが早くもぐずりだす。

「借りていいの。ねえ何冊、何冊。もう選んでいいの。ねえ何冊」弟は館内によく響く声で言った。

「待つて最初にお兄ちゃん、ちょっと、ねえそっちじゃない」

弟を制止しつつ、兄をうながす。兄はふるふるな頬を揺らし、落ち着きなく体を上下させている。

「お母さん漫画もあるよ。漫画借りていい」

兄が棚にある石森章太郎の単行本をみつけ、沈んでいた目の色が変わった。次にはエッセイ漫画を見つけた。

「あっ漫画、ねえ漫画借りたい。兄ちゃん、漫画、漫画」弟も見つけたらしい。目に入る物全てに吠える犬みたいだ。

この家族の喧しさにたまりかねた館内の数人が、本を読むのを諦め外に出て行く。ガラス越しに強烈な日差しに一瞥をくれ、家族と日差しを天秤にかけ、野外に繰り出していく。

これほど煩かったら読書どころではなさそうだ。こいつに目をやると、こいつはもう慣れたのか本に目を落としている。

「ちょっと漫画を読ませるために連れてきたんじゃないよ。ロビンソークルーソーとかを、読んでもらいたいの」

息子の馬鹿っぷりを毎度見せ付けられているのだろう、切実な訴えだ。しかし読んで欲しい本が、ロビンソークルーソーとはいささか泣けてくる。母親はこのくらいは読んでくれるだろうと折衷案として提示したやもしれん。それはそれでまた悲しい。

言われた小太りの兄は、興味など微塵もないのだろう素っ気のない返事をし、目線だけは漫画から目を離さなかった。

「あと来年から歴史の授業が始まるんだから。歴史の本も借りなさい」

母親は坂本竜馬、伊藤博文、と無難な本を棚から出した。

「じゃあ、これも、これ漫画じゃないから借りてもいいでしょ」

兄が純文学作品を引っ張り出し借りるといふ、この落ち着きのない子が、難しい漢字にも負けず、辞書を引いてまで本を読むとは思えない。

「そんなのあんた読めないでしょう。しまってきてよ」母の怒りは沸点に近づきつつあるようで、険のある声を出す。

私も一刻も早く借りて図書館から出て行ってほしい。

「いいじゃん別に、もう歴史もなんも読まねえかなあ」小太りの男の子は、母の怒りにつられるようにして唾を飛ばし、臍を曲げた。

私が思うに小太りの男の子は、はなから本を読む気がなく、読めない言い訳で、読めなさそうな本を作為的に選んだのではないか。浅知恵だ。

「まだ一、なあまだ一。兄ちゃんばっかだよ。俺むこうで選んでるから」

弟の辛抱がきかなく、歩き回ろうとする。

「もうちょっとだって言ってるでしょう。勝手なことはしないでよ」

もうこうなっては手がつけられない。安全な所に隠れて、事の次第を静観することにした。

母親は適当に本を見繕い、乱暴に本をまとめカウンターに持っていった。

すると、たががはずれた小太りの男の子が「母さんが勝手に選ぶなよな」と母親の背に叫ぶ。母親は意に介さず、貸し出しの手順を踏んでいく。

弟はわざと力強く床を鳴らし母親の後を付いていった。

最後まで喧しく、果ての音量を知る前に去っていく。

ガラス越しにもう戻ってこないのを確かめて、棚から出る。ほんの僅かな時間であったが、長く感じられた。それは私だけだけでなくこの館内にいる誰もが共有していただろう。一斉に安堵の息が漏れた。

「帰ったなあ」

こいつは葉はさみ本を閉じ、腕を前方にやり伸びをした。内心、気になっていたらしい。

「しかしあの母親もわからんことはないな」理解あるようなことを続ける。

最近、天敵である子供が多いと思ったら、現在夏休みであるという。約一月、家に居るそうなの。

あの兄弟が丸一日家に居るのだ、母親としては難儀でしょうなあ。

炎天下の中、些細なことでも精神が逆立つのに、歯抜けの子供がギャーギャーと昼夜構わず喚くのだ。起きてから、寝るまで落ち着く時がないのだろう。

いくら子供とはいえ体力がある。母親は、いつかは疲れ、黙るだろうと考え、叱りたいのを我慢して家事に精をだす。

ところがどっこい待てど暮らせど、子供が静かになる気配がない。と、ここで母親は一計を案じる、我が子はこのまま落ち着きがなくて大丈夫だろうか、他所様の子と比較すると郡を抜いて馬鹿に見える。

我が子を鑑みて、差し引きして考えると肌が粟立つ。いくらなんでも成人するまでは大人しくなるとは思うが、それも楽天過ぎるのかしら。目前の危機としては、後3,4年で訪れるだろう反抗期だ。

ちらりと我が子を見ると、全裸で外に出ている。ホースを上に向け咲をつまみ水の勢いを増しさせて浴びていた。

こりゃいかん、と口を閉じるのも忘れたに違いない。

もうこうしてられない。やっていた家事を放り出し、長男と次男の手を引き図書館に出向いた、ってところだろうか。

こいつの呟いたのも理解できる。

「さて、そろそろ帰るか」

こいつは腰を上げ、首を回した。私は欠伸をし、安眠するために人気のない視聴室に向かった。

了